

Hyogo

マンデー経済



ウィル



入社

自分の手で一流企業作ると決意

不動産事業を手がけるウィル(宝塚市)の取締役、友野泉さん(49)は小野市で育ち、入社するまで市内の実家から大学に通っていた。

4人姉妹の次女として、埼玉県で生まれました。小野市に本社がある金物製造会社に勤める父の転勤で、4歳の時に小野へ引っ越し、自然の中で育ちました。自宅から小学校までは30~40分かかりますが、帰り道では山の中に入って基地を作って遊ぶこともありました。

大好きな姉の背中を追って、バレーボールを始めた。

球拾いでいいからと頼み込んで、小学3年生からバレーボール一筋です。高校卒業までずっと続けました。当時、住んでいた団地では、家の壁に向かって一日中ボールを打ち込んでいました。今思うと、パンパンと大きな音が響いて、迷惑ですよ。

靴の中には重りを入れて通学し、足腰を鍛えました。学校で立って授業を受ける時でも、筋トレをしながら話を聞いていたほどです。チームではエース級で、地区の大会で上位に入ったこともあります。バレーボール選手を目指していたのですが、現実はなかなか厳しくて。高校卒業と同時にバレーはやめました。

姉は、妹の私から見たら美形で頭が良く、運動も得意でした。生徒会活動もしていましたね。とにかく何でもできてしまうんです。先生や友達から、姉と比べられるのがすごく嫌でした。じゃあ、私の強みは何かと考えると、こつこつと努力することだと思ったんです。だから、小さい頃から努力家だったと思います。大学は自宅から通うよう親に言われていて、神戸商科大(現兵庫県立大)に進みました。

就職を前に、さまざまな選択肢を検討したという。

就職活動が始まると、大企業に入って

生活を維持しつつ、アフターファイブに自分らしさを発揮したいとぼんやり思い描いていました。公認会計士の資格を取って落ち着くことも考えました。これは大学の同級生に多かったですね。いとこが米国で飲食店を営んでいたのも、ウェイトレスをしながら毎日自由に生きるのもありかな、とも。就職しないことを含め、自らの進路に迷っていました。

大手企業の説明会に行ったこともあります。そこで「私は我が強くて、普通の人はちょっと違う。それでも受け入れてもらえますか」と質問しました。多くの担当者は目を伏せて、お茶を濁したような返事しかしてくれませんでした。

でも、ウィルの担当者は違った。「そういうの方が面白い」と言ってくれたのです。入社1年目の女性で、高校の先輩でした。この会社なら、経歴や性別に

関係なく認めてくれる環境があるなと思います、入社することにしました。

大企業に入るのではなく、自分の手で一流企業を作ろうと思ったのです。当時、社員は30人ほど。その半数は同期でした。

入社後、同僚からは「何で、そこまでやるの」とよく言われた。



妥協せずに徹底的にやるのが、結果の明暗を分けるからです。

新入社員の頃、こんなことがありました。商標について調べてほしいと言われたので、本を買い込んで読みあさり、弁理士会の無料相談窓口にも足しげく通いました。休日は閉館まで図書館にこもり、時には大阪にある特許庁の関連施設まで出向くことも。自分のできる限りを尽くし、商標の概念や取得の過程を調べたのです。1カ月半後、上司に報告書を出すと「ここまで調べたのなら、直接、社長に報告した方がいい」と言われました。

それまで、創業社長の岡本俊人(現相談役の伊知地俊人)氏と込み入った話をしたことはなかった。

戸惑いながら報告すると、社長から「すごいなあ」と褒められました。「どれだけ本気で調べたのか、読めばすぐに分かった」「何を聞いても分かりやすい返事が返ってくる」と。うれしかったです。社会人になって初めて、自分の仕事への評価を社長から直接聞きました。力の限り調べたことで、社長に報告するチャンスができた。その後は社長から直接、仕事の指名が来るようになりました。

この経験から、何事にも「これでよいのか」と自問自答するようになりました。「胸を張ってやり尽くしたと言えるのか」「自分の行動に誇りを持てるのか」といつも問いかけ、自分と戦っているんです。(聞き手・塩津あかね)

◇原則、毎週月曜に掲載します。

マイストーリー ~経営者は語る

友野 泉 (49)

＝元代表取締役、現取締役

4人姉妹、姉や妹たちと写真に納まる友野さん(左端) 1988年8月(本人提供)



母親の車の上に乗る友野さん 1981年8月(本人提供)